

人間図鑑

笑いのある人生こそ最良なり

サラリーマンことわざ笑辞典の

曾田 英夫 さん



職場に笑いを

ユーモアを!

「ことわざ」とは先人の智恵がこめられていて、含蓄の深さに感銘を受ける。その「ことわざ」に笑いと、アイロニーを加えてみたらどうなるだろう。それはまるでユーモアあふれた現代の風刺画を見るようである。ニタニタと笑い、時にはフキ出す。

●「小食習って家を作れ」↓小食習って家も作れず。(質素、儉約して

も、高すぎて家も作れない) 作者は曾田英夫さんだ。曾田さんは財団法人損害保険事業総合研究所で、首席研究員として、高齢化社会の研究をしている。

「医療看護、健康、生きがい、年金等の研究をしています」

取材の日、人身事故で電車が遅れた。約束の時間に、十分ほど遅れたので、駅で遅延証明書をもらって曾田さんに見せた。

曾田さんはニコッと笑うと、近くの喫茶店へ向って歩き出した。

広い額は理知的であり、笑うと小さな目がやさしい。

首席研究員という肩書きのイメージからか、学者タイプにも見える。

「私は大学を出て、損保会社で、自動車保険の業務を担当していました。東京、金沢、富山、名古屋と転勤しましたが、自動車の事故処理を十八年間やりました。これが大変な仕事でね。加害者、被害者の間に入って命の値段を決めるのです。ストレスがたまりませぬ」

同じようなストレスを持った同僚や、部下のいる職場。ストレスの発散はやはり酒しかなかった。

「サラリーマンことわざ笑辞典」を始めた動機は漠然としています。が、職場に笑いをつくりたいという気持がありましたね。職場に明るく笑いは、曾田さんの仕事哲学だ。もともと笑いに対する土壌はあった。子供の頃(京都・テレビで吉本新喜劇を見て育った)。

三人兄弟で、ダジャレを競い、つまらないと△つまらないダジャレはやめなジャレ▽とやり返されましたね。関西人は、会話を愉しむ術を知っているのです。東京の人は自分の言い分を一方的に主張するので会話が成り立たないのですね」

●「一を聞いて十を知る」↓百を聞いて十を知る(情報洪水におぼれている人のこと)

会話の中にダジャレを入れていると結構、職場の空気がなごんだという。

曾田さんは三年前に本社の統合企画部に戻ってきて、二年前から今の研究所に向向している。

三年前に「どうやったら大企業病から脱却できるか」という経営テーマをかかえた。折りしも『がんばれ! 元氣』という小雑誌があった。

「上司批判でも何でも自由に書けるアングラ雑誌でした。大手自動車メーカーの工場で働く人が、一人で、その手の雑誌を作って話題になったことがあるのです。それにヒントを得て生まれた雑誌でした」

勝手なことが書けるから、ストレスのガス抜きにもなる。結局は会社の為にもプラスになる、というので会社側も補助金を出してくれたとか。

曾田さんが、この雑誌に、投稿したのが「サラリーマンことわざ笑辞典」であった。

初めて公の場に登場したのだ。毎日、メモ帳を必携して、いいものが出来ると書き込んでプールしておくのだ。

「昼休みのサラリーマンを眺めていると、ふとヒントが浮かぶこともあります。でもやはり休日の午後、

机の前で伸吟する方が多いですね」

●「言うは易し行うは難し」↓言うは難し行うももっと難し(これが現実では)

『がんばれ、元氣』の小雑誌は三号で廃刊してしまった。

そうすると、こんどは他社にも同じ趣味を持つ同好者がいて、月一回程度だが作品を持ち寄って批評会を始めた。

歯に衣を着せないで、言いたいことを言い合おう。

辛辣な合評会で作品はさらに磨かれ、増えて行った。

「出来のいい作品だと、サラリーマンの場合、身につまされて逆に笑えない場合もあります。例えば、窓際族をテーマにした場合。自分の将来を見る思いがしますからね」

だから、サラリーマンが読んで笑えるものを作るように心がけています。

●「今ないたカラスがもう笑う」↓今決ったことがもう変わる(朝令暮改)

「全部、おもしろいのは無理ですね。読み手の感性の問題もありますからね。ただ、ことばで発するよりも活字にしたら面白い場合もあります。まあ三割ヒットがいいところかな」



どんとこい 高齢化社会!

「私は団塊の世代ですがね、高齢化社会の研究をしているのは、自分の将来を研究しているようなものです。『サラリーマンことわざ笑辞典』もこれからお年寄りが、同好会を作っ

て始めたらしいと思いますね」
老人性痴呆症は今や深刻な社会問題だ。家の中で炊き火だといって、座布団に火をつけた老人がいた。

その人は無趣味で、毎日、テレビばかり見ていたそう。夜中に家人の眼を盗んで抜け出して、電車を止

めてしまった老人もいた。

「高齢になると、趣味のない人はみじめですね。趣味は若い内から四つぐらい持っていた方がいいですね。私は、『ことわざ笑辞典』の他に鉄道の研究もしていますよ」

高齢者が求めるものはやはり、生きがいがある。生活にも充実感がうまれる。

「お年寄りが、川柳を始める人が結構いるのです。入門しやすいからでしょう。投稿して入選すると活字にもなりますからね」

『ことわざ笑辞典』も、川柳と体質的には共通するものがある。風刺と、ウィットが求められるからだ。だから『ことわざ笑辞典』も

これから、商業誌が投稿欄を設けるようになる、同好者も増え、お年寄りに門戸を開くことにもなる。

『小事にかかわりて大事を忘れるな』↓(新事業にかかわりて本業を忘れるな)

日本人は勤勉と、頭の良さは世界でも秀れているが、惜しむらくはユーモアのセンスが劣る。

これは国民性といってしまえばそれまでだが、冗句を言ううと馬鹿にされたと思ひ込んで怒る人間もいる。

「笑文芸を始めると面白いですね。川柳も、狂歌も笑文芸です。回文というのがあります。私が作ったものですが、アイツキカケツケサンバイマイバンサケツケカキツイ、八、一気駆け付け三杯毎晩酒漬けがきつい、です」前から読んでも後から読んで

も同じ文章だ。これも知的作業だから、ボケ防止になるかもしれない。ゴルフ、ゲートボールも結構だが鉛筆と、メモ用紙があれば出来る笑文芸の世界に、高齢化時代の曙を見たといったら、大げさだろうか。

曾田さんが展開して拡ろげてくれた新しい試みの世界に、大いに共鳴し、参加したいものだ。

「私の『サラリーマンことわざ笑辞典』、やはり家内は無関心ですね」優しい目が笑っていた。